



# 舊道新道

田山花袋



道路のことを考へるといろいろなことが思ひ出されて來る。第一に昔の道路がすっかり過去の中に埋れて了つて

る形が悲しい。それは大きな街道は大抵汽車の線に添つてゐるから、その路の髣髴はわけなく探し出すことが出来るが——現に東海道などはその一例だが、しかしわざ／＼探つて見たところで、たゞ一地方の空氣の中に敢へなく埋め

られて了つてゐることが感じられるだけで、とても昔の面影などは求められない。それにしても、その昔の街道の賑やかであつたことは！馬車、車、その以前ならば駕籠、脚絆をつけた人、太刀を挿んだ人、その雑踏はそれからへとあとをつけて、あれであればこそつらい旅も出来たと言へるやうな空氣が到るところに漲つてゐるのである。

『膝栗毛』に書かれてあるやうなことは、あれは無論誇張されてあるのだけれども、それでもあれに近い空氣がその長い間に幅をして横つてゐたといふとは、考へて見ただけでも興味を惹かずには置かない。それは汽車の旅もあるが、それ以上に面白かつたといふことが想像される。一月も二月も草鞋ばきで歩く。つかれて宿る旅舎には藤の花が咲いてゐる。前垂をした女中が賑かな聲を立て、送つたり迎へたりしてゐる。三日も四日もかゝつてやつと向うの山が姿を出して来る。そこには入江があらはれて来て、そこから向うへわたる近路の舟が出る。まア、これで長く歩いて来た疲勞が休められる。そしてまたその舟の中にはあちこち

の旅行者などがゐて、互ひに何のこだはりもない話を取り交す。かうして旅路の興は今の汽車ではとても求めやうとしてもとめられない。さう思ふと、昔の道路がたまらなくなつかしまれる。

私は東海道を遡して歩いたことはないが、あちこちとその時分のことを知つてゐる。中仙道もかなり歩いた。今日では大門を越して杖突峠から伊那に出て、それから木曾の宮の越へと出て行く中仙道の副路などは、その地方の人か何かでなければとても誰も知るまいが、そこを私は二度も越した。それから私はまだ汽車の出来ない時にあの陸羽の濱街道をずつと歩いた。あの道はさびしかつたけれども、詩に富んだ路だつた。今でも私はそのさびしい松並木の鳴る音を忘れることが出来ない。また松並木の間々に荒れた小さな古驛の埋れたやうになつてつゞいてゐたのを忘れることが出来ない。太平洋の波の音が遠くその松籟に雑つてきこえて来たのを忘れることが出来ない。久の濱あたりはことに好かつた。さうかと言つて、今日汽車でそこに

行つて、あの久の濱の海水浴に行つて見たところで、とてもその時の感じなどは味ふことが出来ない。すべてあたりが俗化されて了つてゐる。また簡單に行けるようになったといふことが主觀的に旅客の興を淺くして了つてゐる。道路——長い道路を毎日／＼歩いて行くためにひとり手に醸されて来るやうな旅の樂しみは、とても今日では味はれない。

二

ある年の冬妙義にゐてふと木曾を歩いて見る氣になつて出かけた。あの旅も忘れ難い。沓掛、追分、御代田——あそこまで行くと、山の雪が寶玉のやうにかゞやいて、八ヶ岳と蓼科の美しさと言つたらなかつた。淺間も鹽灘の少し先きのところから振返つた形が好かつた。あの旅などもやはり路の樂しみ——道路をたどることの樂しみと言つて好かつた。臺地を下に下ると、川を越して往昔の望月の宿があつた。あそこなど今は全く山村になつて了つたであらう。

和田ではともすると旅客が雪にさゝへられて一夜二夜そこに泊らなければならぬ様なことがあつた。それほどあの和田峠の雪は深かつた。そしてそれを越すと、あの諏訪湖が見える。半ば氷と雪とに白く、半ば日に解けて藍色になつてゐる諏訪湖が。それを今日のスキイの賑はひに比べたら、それこそ何んな氣がすると君だちは思ふ。鹽尻の峠の上から見た富士！ 凍つた富士！ あの眺めなどもやはり忘れられないものゝ一つである。

それに私は鹽尻からあの桔梗ヶ原に添つた中仙道の泥濘——日の當るためにそこだけ解けてゐた泥濘に何んなに苦しんだか知れなかつたことを今でもはつきりと思ひ起す。また其頃は日本アルプスなどのことは誰も言ひ出したものもなく、知つてゐるものもなく、自分も知らずに、ただ無闇に陽に光る山の雪があると思ひながらつらい思ひをして通つたことを思ひ起す。贅の宿がちやうど前の晩か何かに燒けて、まだ青い烟がそこゝに立つてゐる中に燐出されの人たちが蓆がけをしてゐたことを思ひ起す。しかし

今はあの中仙道なども誰も通るものもなくなつて了つたらう。鳥居峠の折れ曲つた路なども誰も知るものはないであらう。汽車がたゞこがらしのやうな音を立て、谷を穿つて通つて行つて了ふであらう。

私はその時須原で大雪に降こめられて、前にも後にも行けずに、二夜そこに泊つたことを記憶してゐる。

### 三

従つて今の人と昔の旅客としては、道路と言ふものについての考へ方が非常に違つてゐる。今日では山の中であつても通れないやうなところをも昔の人たちは平氣で通つてゐる。だから昔の人の旅行記などを讀む場合に、ちよつと飲み込めないやうなことが往々にしてある。『奥の細道』などにもさうした場合が二三ヶ所ある。それに昔の人は船を非常に多く利用してゐる。あんな川に舟が通つたらうかと思はれるやうなところが、立派な一つの路を成してゐるやうな場合を私は見出す。

錢屋五兵衛の『東巡日記』といふ本からだが、その中に前の夜は桐生で泊つて、そのあくる夜が佐野、そのあくる夜が栗野、それから日光となつてゐるが、この栗野が今の人にはわからない。さうした地名が街道にはないので、

これはてつきり何かの間違だらうと誰かが言つたが、それが即ち昔の旅客の道路に對する状態がわかつてゐないためで、彼等は路さへ近ければ――また路さへあれば、何んな山の中でも平氣で通つて行つたのである。彼等は佐野まで來て、日光に行く近路を今日ではとても通れるとは思へないやうな山の中に求めて、ぐんぐんそこを通つて行つたのである。栗野といふ村は出流の山の中にある。つまり山越しに日光に入つて行つたのであるといふことがそれとはつきりわかるのである。

芭蕉も尾花澤に躰える時に、さうした近路を深い深い山の中にもとめた。

昔の街道の中で、峠といふものが非常に特色のあるものであつたことを私はつゞけてこゝに挙げたい。峠といふも

の、美と快とは今の汽車の旅客の多くは知らないところである。それは大きな山脈を汽車で越して行くのはわるくないが、日本でも九州の矢嶽あたりを通る時にはことにその快を感じるが、しかも昔の峠として美と快とは、おのづからそれとは異つてゐる。第一に大きな峠を登つて行くといふ形が面白い。第二に雲と霧の深い中に鶯やほととぎすが啼いたりしてゐる具合が好い。第三に峠が次第に近く碧い空がくつきりとそこにはれて來る形が好い。ことにその峠にある茶屋が一種のカラアに富んでゐて面白い。大きな茶釜、赤い前垂をした女、そこでは大低賣つてゐる力餅、寛から流れ落ちてゐるつめたい手も切れるやうな水、それを喘えぎ喘えぎのぼつて行つて口に當て、飲む愉快は忘れられない。私の知つてゐるさうした峠は、信州の上田から松本へぬける保福寺峠。奈良井から木曾へと入つて行く鳥居峠。關東附近では伊豆の天城。草津から信州へ越す澁峠。九州では肥後の人吉から加久藤に出る加久藤峠。東北では盛岡から羽後の生保内に入る仙岩峠。箱根などもその一つであ

ると言へるが、中でも保福寺峠のあの大きな茶屋は、はつきりと私の眼に残つてゐる。仙岩峠ではそこで日が暮れて了つて、止むなくその小さな小屋の隅に一夜ねかして貰つたことがある。加久藤越は暑い、日を乗合馬車で越した。

しかしかうした峠でも汽車のないところは、自動車の通つてゐる處になつてゐるところもないではなかつた。伊豆の天城などはすなはちその一つである。それからこれは今年土佐に行つて見ての感想だが、あそこなどは峠とも言つた山路が立派にひらけて自動車が行つてゐるのを到るところで見かけた。例の末不見スエミといふところ——昔は行つても盡きぬ山路で、それでさういふ名を得たのであつたが、今日では立派な路が出來て、自動車で三四時間で輕快にそこを通過して了ふことが出來るやうになつてゐる。また下の加江から中村の方へと出て來る路も、ひどかつた昔に引かへて、今は簡單に自動車で通過して行くことが出來るやうになつた。言ひ換へれば一度衰へて了つた街道

が自動車のために復活したばかりではなく、自動車と汽車とが競争して、汽車がかへつて自動車に押されてゐるやうな形を私は到るところで眼にした。

『田舎は却つて自動車の交通といふ形になつて了つたね』  
私は到るところでこんなことを言つた。

#### 四

でもやっぱり田舎の交通は昔の面影を存してゐるやうなところがある。徒歩から乗合馬車の時代になつた頃、私は曾一度弘前から秋田へと出て来たことがあつたが、またそれから暫くして秋田から山形へと行つたことがあつたが、その時には乗合馬車が今の自動車と同じやうに發達してゐて、しかも互ひに競争してゐる何組彼組と言ふ二つの組合があつて、それが熱心に客の争奪戦をやつてゐたことがあつたのを記憶してゐるが、何でも切符制度が何かで、驛から驛へと間斷なしにその乗續きをやつてゐて、今の自動車にも劣らないくらいゐるの便利さを持つてゐたやうであつた。勿

論その遅速は比較にならないけれども――。

單に面白さの點から言つて見ると、昔の乗合馬車時代のカラアの方が却つて特色に富んでゐるはしなかつたかと思はれた。昔は休む宿驛が多く、從つて茶店が多く、トルストイあたりの短篇のシインになるやうなところが到るところにあつたが、今は速力が早いために、さうした宿驛の必要もなく、たゞ晝飯でも食ふやうなところがその途中に出来る位のものでつた。それに乗合馬車の馭者は俠客の子分でもありさうな巖丈の中年の男が多く乗つてゐて、いかにも崎嶇の多い人生に馬を強ひて鞭つてゐるやうに憐れさを見せてゐるが、自動車の運轉手には、何かと言へばハイカラな、勞働でも別に耻ぢてもゐないやうな、むしろそれを得意ぐらゐるに思つて、たまにはそこらの見知越の村娘の歩いてゐるのを此方から呼びかけて乗せて行つてやるといふやうな餘裕をすら持つてゐる若い男の多いのを見懸けた。かうした中にも絶えず移り變つて行く人生をそれと指さすことが出来た。

さういふ形として、汽車の出来ない時には、道路など何うでも好いと思はれたものだが、縣道でも國道でも比較的閑却されたものだが、それがまた自動車の發達につれていくらか重んじられて來さうになつたのは不思議である。従つてある時代よりも今日は非常に道路が重く見られるやうになつたに相違ない。

縣道國道などといふことにもいろ／＼な形があつて面白い。縣によつて好いところもあればわるいところもある。

さういふことはよく誰の口にも言はれる。しかしさうでなしに縣道國道にも運不運があるといふ風に見て見るのも面白くないことはない。折角立派な縣道が出來たのに、それが何の役にも立たずに、旅客すら通らずに、そのまゝ草に埋れて了つたやうなところもあちこちにある。福島から羽前に入る道路などその一つである。また、脊梁山脈を横ぎ

つてゐる關山越などもその例に洩れない。上越の境にある三國越、それと並んでその後が開かれた清水越、あの街道は二つとも立派な道で、旅客も多ければカラアにも富んでゐるやうなところであつたが、信越線が出來てからすつかり閑却されて、全くの山村に埋れ盡して了つた。従つて街道の温泉なども夥だしくさびれ、三國街道の湯島などは街道の位置を捨て、再びもとの山の中に引込んで了ふやうな状態にすら立至つた。ところがそれがまた今度上越線の出來るのにつれて、再びその繁華を取かへすといふやうな形になりかゝつてゐるが、これなども面白いひとつの街道の變遷とすることが出来るであらう。その他那須野の荒蕪が汽車が出來たためにひとり手に開けて行つたといふやうな形も細かに見て來れば非常に面白い。そこにも私は天然と人間との深く深く入り入つてゐるさまを見出した。